

問1 著者がいう「！」とは何か。100字以内で説明しなさい。

問2 下線部(1)には、アーティストである内藤礼氏の「！」が表現されているが、この「！」から「？」を導き医学や生命科学分野のサイエンスに仕立て上げるならばどのような「？」が考えられるか、100字以内で述べなさい。

問3 下線部(2)に関して、あなた自身はどのように、「！」を感じる心を育成・醸成すべきだと考えるか、300字以内で説明しなさい。

(秋田大学医学部医学科 2018 年後期)

II 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

“サイエンスの視点、アートの視点”齋藤亜矢著

(前略)

京都大学の理学部を卒業し、医学研究科の修士課程に進んだ。しかし、博士後期課程では、東京芸術大学の門を叩き、博士(美術)の学位を取得する。その後、野生動物研究センター、教育学部と経て、ふたたび美術系の大学に戻ってきた(京都造形芸術大学)。

こうして書くと、異分野を軽やかに渡り歩いてきたように思われることがある。でも、そんなに器用な人間ではない。立ち止まって悩みながら進むうちに、いつの間にか蛇行した道になっていただけだ。さいわいなことに、さまざまな分野を経験したことが、今の研究につながっているように思う。

「ヒトはなぜ絵を描くのか」をテーマに研究をしている。チンパンジーとヒトの幼児との比較研究をはじめ、認知科学の手法から、絵を描く心の基盤、さらには芸術の起源を探る研究だ。テーマは文系的だが、アプローチは理系的。でも、普段関わっている分野が境界域なせいか、研究の場面で文系・理系を意識することはほとんどない。

(中略)

サイエンスとアート。相反する点は、いくらでもあげられる。

たとえば普遍性と偶然性。サイエンスの実験では、条件をそろえれば毎回同じ結果になることが求められる。データは平均化され、一回きりの出来事は「外れ値」として扱われる。しかしアートでは、偶然性が大事にされ、平均値でなく「外れ値」にこそ光が当てられるようなことが多いように思う。

たとえば、「わたし」の存在。サイエンスの論文では、「思う」。より「考えられる」という表現が好まれる。だれが考えてもそう解釈できる無理ない論理だという意味だ。

つまりサイエンスは、できる限り「わたし」を排除する。いっぽうでアートは、むしろ「わたし」がなければ始まらない。「わたし」がこう思う、「わたし」はこう感じる。他の誰もが気づかなかった「わたし」の「思う」や「感じる」を切り出して表現する。解釈も鑑賞者によって異なり、そこに一つの正解があるわけではない。

もはや 180 度違う部分も多いのだが、サイエンスとアートは対極に位置するわけではない。その根っこにこそ共通するものがある。

その思いを強くしたきっかけが、現代アーティストの内藤礼さんのお話だ。

(1)「たとえば今、木漏れ日からさす光がカーテンにきちきら映し出される感じ。」

そんな普段の生活の中の一場面や自然の美しさを、いいなあ、と感じている。ほんとうはそうして自分で感じているだけでいいのだけれど、その「感じ」をアートの中に表現したい。別にだれがしなくてもいいのだけれど、やらずにはいられない。わたしは、究極に美しいものをつくりたい。

この言葉が、自分が研究者としてめざす姿勢と重なり、サイエンスからアートの分野に足を踏み入れたときの

迷いを吹き飛ばしてくれた。

(中略)

そして大胆に一般化するならば、サイエンスは、「！」を「？」に変えて、その答えを追究していくもの。いっぽうのアートは、「！」をかたちや音に表現していくもの。そんな風にシンプルに表せるのではないかと考えるようになった。

(中略)

(2)そして、どんな分野に進むにしても、まずは「！」を感じる心と「？」を探す心を磨くこと肝心ではないか。

(中略)



この「！」だが、イメージにぴったりの作品がある。岡本太郎の「若い夢」(左図)だ。以前、滋賀県甲賀市にある MIHO ミュージアムで土偶展が開催されていたとき、展示会場の入り口で、その巨大な顔に出会った。頬杖をついて、うわあと、よだれでも垂れてきそうな笑顔:太郎が縄文に出会ったときも、きっとこんな顔をしていたのだらうと思った。

(中略)

思い出したのは、大学二回生の夏、はじめてフィールドワークを学んだ屋久島だった。その年にはじまった「屋久島フィールドワーク講座」に参加し、10日間ほどの合宿生活を送った。現在、京都大学総長の山極壽一さんや霊長類研究所所長の湯本貴和さんをはじめ、霊長類学、生態学、動物行動学、人類学などの専門家の指南で、屋久島の深い自然を存分に味わった。

フィールドワークでは、文字通り、五感を総動員して自然と向き合う。直接目で見る。耳で聞く。鼻でかぐ。ときには手で触ったり、舌で確かめたりすることもある。それも、サルならサル、植物なら植物、という個別の見方はできない。さまざまな生き物が環境の中で互いに関わりながら生きているからだ。そのまっただなかに身を置き、からだ全体で向き合うことのリアルさ。ざわざわとするようなたくさんの感覚にさらされ、おのずと「！」や「？」があふれ出す体験をした。すぐそばに第一線の研究者がいて、「？」をぶつけると世界が広がるような答えが返ってくる。「！」や「？」がぼこぼこ連鎖して生まれた。あのとき真っ黒に日焼けしながら、きっと太郎の彫刻のような表情をしていたと思う。

(中略)

「感性は、言葉や観念でなく、からだを通じた体験からしか生まれえない」。画家の横尾忠則さんが、以前ラジオでそのようなことをおっしゃっていた。普段の生活のなかで、わたしたちはついついからだを忘れがちだ。必要な情報の多くが、インターネット、テレビなどのメディア(媒体)を通して言葉で入ってくるからだ。

でも、からだを通してしか感じられないものがたしかにある。学生のとくに屋久島やボルネオで、それを強烈に体験できたのは本当に恵まれていたと思う。だからこそ、日々の暮らしのなかでも同じだと気づくことができたからだ。

(後略)

<出典:「図書」 2017年7月号(岩波書店)より抜粋,一部改変>